

## TAITO フューチャースクール検討委員会 先進校視察 報告

- 目 的 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた課題に対する解決策や、これからの学校創りに求められるノウハウ等、今後の台東区立学校における学校教育及び教育環境の検討の参考とする。

### 豊島区立池袋本町小学校・池袋中学校

- 1 視察日時 令和6年11月25日(月) 午前10時00分から午前11時30分まで
  
- 2 参加者 TAITO フューチャースクール検討委員会 委員ほか 7名  
 台東区立上野小学校長 田中 康雄 先生  
 台東区立駒形中学校長 渡邊 和彦 先生  
 台東区立忍岡中学校長 金栄 晃弘 先生  
 台東区教育委員会 事務局次長 前田 幹生      庶務課長      山田 安宏  
                                  教育改革担当課長 増嶋 広曜      統括指導主事 嶋山 繁善  
                                  教育改革係長 林 大輔

### 3 報告事項

#### (1) 概要

池袋本町小学校・池袋中学校は、小中の絆を育む「学びの拠点」、小・中・地域がつながる「交流の拠点」、災害に強い「防災の拠点」、四季を感じられる「緑の拠点」をコンセプトとして平成28年9月に小中併設一体型校舎が完成した豊島区で初となる校舎併設型小中連携校である。義務教育9年間の学びと育ちの連続性を保障する小中一貫教育連携プログラムの教育効果を生かすため、校舎の中心に小中学校で共有する施設を配置し、その左右に小中学校のエリアを分けている。

小中学校が効率的で協働的な学習環境をシェアリングしつつ、子供たちの体格差や動線に対する安全面に配慮した、小中学校の独立性も確保している。

小学校の普通教室は、廊下側にガラスで仕切られた小スペースと開放できる扉で「オープンスペース」とつながっている。「オープンスペース」には、豆型テーブルなどの移動できる家具を配置している。

中学校の普通教室は、片廊下型教室配置である。廊下には作り付けの机や椅子が配置され、「知の交換」として教師と生徒や生徒同士がコミュニケーションを図れる場としている。

小中学校の普通教室に可動式の天吊りプロジェクターを設置し、黒板面の映写用シートに映像等を映せるようにしている。

学習情報センター(図書室)を学校の中心に配置している。内装や家具等に温かみのある木材を使用するとともに、ICT環境を完備し、1人1台端末での調べ学習や発表ができるようにしている。

職員室は、壁で仕切ることなく1つの部屋を小中学校の先生が共有する空間となっている。また、席は固定されているが、従来の袖机ではなくフリーアドレスデスクを採用し、一人一人にデスクワゴンが割り当てられている。



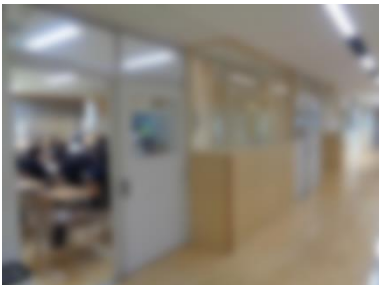
小スペースとオープンスペース



オープンスペース



天吊りプロジェクター



中学校の教室と廊下



作り付けの机や椅子



職員室のフリーアドレスデスク

## (2) 授業の様子

- ① 1人1台端末を活用していた学級は、小中学校共に1学級であった。
- ② 小学校では、多くの児童が自席で学習しており、周囲の児童と意見交換等を行っていた。  
視察した授業においては、小スペースやオープンスペース、豆型テーブルなどを活用した学習活動は見られなかった。
- ③ 中学校では、知識の確認のための穴埋め問題に取り組んでいた。  
視察した授業においては、全ての学級が一斉講義型の授業を行っていた。



1人1台端末の活用



黒板の映像を活用した板書

## ○ 考 察

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けてICT環境や教室環境の整備を図った上で、その環境を活用して子供たちを指導するのは教職員である。

ゆえに、教職員には、整備された環境を活用する意識を高めるとともに、活用するための知識や技能を身に付けることが求められている。

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）において「教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形である」と示されていることから、教職員が研修等を通してICT活用の利便性を享受することにより、授業における活用が促進されるものと考ええる。

そのために、研修内容及び研修体制の更なる改善・充実を図る必要があると考える。

また、教職員がいつでもどこでも誰でも学べるように、授業動画や授業で活用したデータ等を共有する学習系ポータルサイトの充実及び活用促進を図る必要があると考える。

### 【教育環境の整備】

オープンスクール型、片（中）廊下型のいずれの教室配置においても実践することができる学校教育について検討を進めていく必要があると考える。

その際、『新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について』最終報告において「学校施設全体を学びの場」として捉え、「廊下も、階段も、体育館も、校庭も、あらゆる空間が学びの場であり、教育の場、表現する場、心を育む場になる」と示されていることを踏まえて、固定観念を払拭する必要がある。

あわせて、働き方の多様化が進む中で企業が取り入れているワークスタイルの1つである「ABW (Activity Based Working) <sup>1</sup>」も参考となるものと考ええる。

---

<sup>1</sup> ABW(Activity Based Working)とは、その時々業務や活動に応じて、最適な場所や環境を自由に選択できる柔軟な働き方。オフィス設計においては、従来の固定されたデスクが並んだオフィス空間にはない柔軟性が求められ、集中エリア、共同作業エリア、リフレッシュエリア、ミーティングルームなど、異なる用途に合わせたスペースの提供が必要になる。個人作業は静かなスペースで、グループディスカッションは共有スペースでと、一日の中でも業務に合わせて場所を変えたり、プロジェクトのメンバーが隣同士の席で一緒に作業するなど、工夫次第でいろいろな使い方ができるメリットがある。  
東京都産業労働局雇用就業部労働環境課。“コラム～ABWとTBWその特徴と違い”。東京都テレワークポータルサイト,2024-11-01.[https://portal-tokyo-tele.metro.tokyo.lg.jp/cases/cases0017/?utm\\_campaign=D01&utm\\_medium=cpc&utm\\_source=google&gad\\_source=1&gclid=EAlalQobChMlip7295iuigMV-NAWBR19JxZXEAAYAiAAEglejfD\\_BwE](https://portal-tokyo-tele.metro.tokyo.lg.jp/cases/cases0017/?utm_campaign=D01&utm_medium=cpc&utm_source=google&gad_source=1&gclid=EAlalQobChMlip7295iuigMV-NAWBR19JxZXEAAYAiAAEglejfD_BwE),(参照 2024-12-17)